

博多 179

—博多遺跡群第 233 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1422 集

2021

福岡市教育委員会

博多 179

—博多遺跡群第233次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1422集



調査番号 1935
遺跡略号 HKT-233

2021

福岡市教育委員会

序

古くから玄界灘を介して大陸との交流が絶え間なくおこなわれ、文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市には、歴史的遺産が数多く残されています。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、事務所ビル建設に伴う博多遺跡群第233次発掘調査について報告するものです。この調査では中世を中心とした土坑などの遺構を検出するとともに、古代から中世にかけての遺物が多数出土しました。これらは地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、昭和住宅株式会社様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例 言

1. 本書は博多区冷泉町474-1地内の事務所ビル建設に先立って福岡市教育委員会が実施した博多遺跡群第233次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査と整理報告は三浦悠葵が担当した。
3. 遺構の実測は三浦、遺物の実測は山本麻里子、三浦が行った。
4. 遺構・遺物の撮影、製図は三浦が行った。
5. 本書の編集・執筆は三浦が行った。
6. 本書で示す座標は世界測地系を使用している。
7. 遺構の略号は、以下の通りである。
SK：土坑 SP：柱穴等
8. 挿図の縮尺は、各国に添付したスケールで示す。写真図版の縮尺は全て任意である。
9. 貿易陶磁器の時期については、主として次の文献に基づいて検討した。
山本 信夫 2000『大宰府条坊X V～陶磁器分類編～』大宰府市教育委員会
10. 土器の実測図では、断面によって以下のように種類の違いを示した。
土師器・陶磁器 須恵器
11. 各調査の出土遺物や実測図、写真などの記録類は福岡市埋蔵文化財センターに收藏、保管する予定であるので、広く活用されたい。

遺 跡 名	博多遺跡群	遺跡登録番号	0121	分布地図番号	049 天神
次 数	233	調 査 番 号	1935	略 号	HKT-233
調 査 面 積	84.5㎡	期 間	2019年8月19日～2019年9月30日		
調 査 地	福岡市博多区冷泉町474-1				

目 次

I. はじめに	1
調査に至る経緯	1
調査の組織	1
II. 遺跡の環境と立地	4
III. 調査の記録	5
1. 調査の方法と経緯	5
2. 調査の概要	5
3. 遺構と遺物	9
第1面	9
第2面	13
第3面	20
その他の遺物	21
IV. まとめ	22

挿 図 目 次

第 1 図	周辺の遺跡 (1/25,000)	2
第 2 図	博多遺跡群 (1/10,000)	3
第 3 図	調査区配置図 (1/1000)	4
第 4 図	調査区配置図 (1/500) と基本層序	5
第 5 図	第 1 面 遺構配置図 (1/80)	6
第 6 図	第 2 面 遺構配置図 (1/80)	7
第 7 図	第 3 面 遺構配置図 (1/80)	8
第 8 図	SK 0018 (1/40) および出土遺物 (1/3)	9
第 9 図	SK 0029 (1/40)	10
第 10 図	SK 0046 (1/40・1/10)	10
第 11 図	SK 0029 出土遺物 (1/3)	11
第 12 図	SK 0046 (1/40・1/10)・SK 0001・SK 0002 (1/40)	12
第 13 図	SK 0001・SK 0002 出土遺物 (1/3)	13
第 14 図	SK 0003 (1/40) および出土遺物 (1/3)	14
第 15 図	SK 0006 (1/40) および出土遺物 (1/3)	15
第 16 図	SK 0026 (1/40) および出土遺物 (1/3)	16
第 17 図	SK 0044・SK 0054 (1/40)	17
第 18 図	SK 0063 (1/40・1/20) および出土遺物① (1/3)	18
第 19 図	SK 0063 出土遺物② (1/3)	19
第 20 図	その他の出土遺物 (1/3)	21
第 21 図	遺構外の出土遺物 (1/3)	22

図 版 目 次

PL. 1	(1) 1区2面全景 (北西から)	(2) 1区3面全景 (北西から)
PL. 2	(1) 2区1面全景 (北西から)	(2) 2区2面全景 (北西から)
PL. 3	(1) 2区3面全景 (北西から)	(2) 2区1面東側検出状況 (北東から)
	(3) 2区2面東側検出状況 (北東から)	(4) 2区3面東側検出状況 (北から)
	(5) 2区3面南側検出状況 (北西から)	
PL. 4	(1) SK 0001 検出状況 (北から)	(2) SK 0018 検出状況 (北東から)
	(3) SK 0006 検出状況 (南から)	(4) SK 0044 検出状況 (南東から)
	(5) SK 0029 検出状況 (北から)	(6) SK 0046 検出状況 (北西から)
	(7) SK 0062 検出状況 (南から)	(8) SK 0044 土層断面 (南東から)
PL. 5	出土遺物①	
PL. 6	出土遺物②	

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区冷泉町474-1における事務所ビル建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成31年1月31日付で受理した（事前審査番号30-2-1043）。

申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれていることから、埋蔵文化財課事前審査係では遺構の有無の確認が必要と判断した。2019年2月21日に確認調査を実施したところ、現地表面下210cmで遺構が確認されたことから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建物建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、令和元年7月22日付で昭和住宅株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年8月19日から発掘調査を、翌令和2年度に資料整理および報告書作成をおこなうこととなった。

2. 調査の組織

調査委託：昭和住宅株式会社

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：令和元年度・資料整理：令和2年度）

調査総括：	文化財活用部埋蔵文化財課 同課調査第2係長	課長	菅波正人（元・2年度） 大塚紀宜（元年度） 藏富士寛（2年度）
-------	--------------------------	----	---------------------------------------

事前審査：	同課事前審査係長 同課事前審査係主任文化財主事 同課事前審査係文化財主事		本田浩二郎（元・2年度） 田上勇一郎（元・2年度） 朝岡俊也（元年度） 山本晃平（2年度）
-------	--	--	--

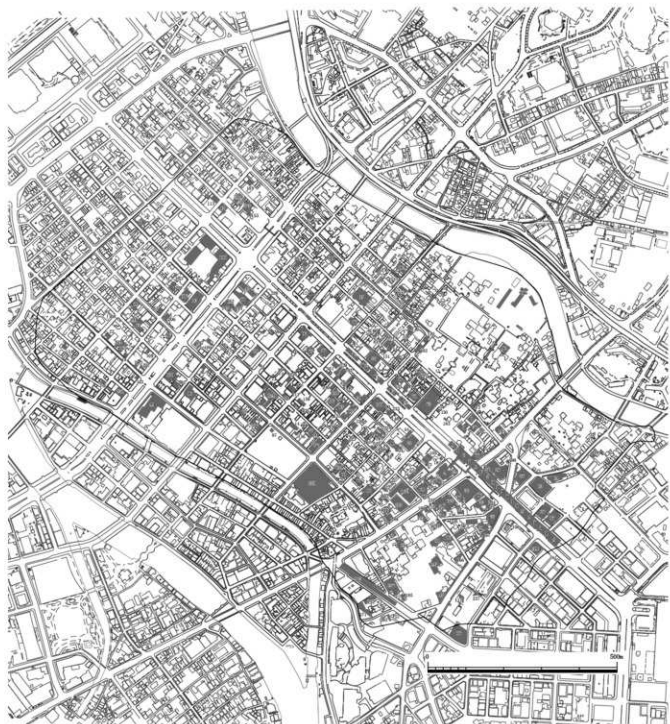
調査担当：	同課調査第2係文化財主事		三浦悠英
-------	--------------	--	------

庶務：	文化財活用課	管理調整係長	藤克己（元年度） 大森秋子（2年度）
		管理調整係	松原加奈枝（元・2年度）

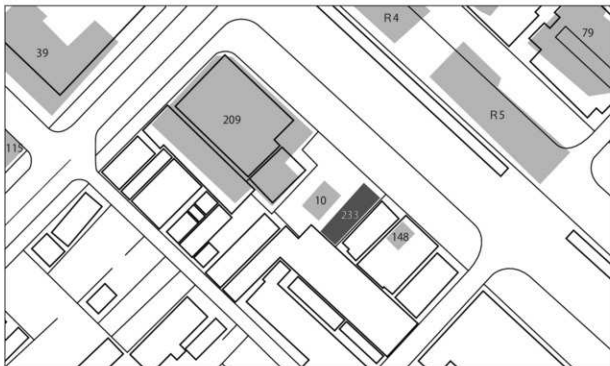


1. 博多遺跡群 2. 箱崎遺跡 3. 吉塚本町遺跡 4. 吉塚祝町遺跡 5. 聖柏遺跡
 6. 吉塚遺跡 7. 東比恵三丁目遺跡

第1図 周辺の遺跡 (1/25,000)



第2図 博多遺跡群 (1/10,000)



第3図 調査区配置図 (1/1,000)

II. 遺跡の環境と立地

博多遺跡群は、箱崎砂層からなる砂丘上に立地する。この箱崎砂層は地質学的調査から縄文時代後期以降に形成されたとの知見が得られている。砂丘は博多湾に沿って東区箱崎から早良区百道にかけて形成され、博多遺跡群の東側の砂丘には堅粕遺跡、吉塚本町遺跡、吉塚祝町遺跡、吉塚遺跡、北東側には箱崎遺跡が営まれる。博多遺跡群は西を博多川、東は江戸時代に開鑿された石堂川、南は石堂川開鑿以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川に画され、砂丘は南から大きく「博多濱」と「息浜」の二つに分けられる。また「博多濱」はさらに二つの砂丘から形成される。

今回報告する第233次調査区は博多浜の中央やや北側に立地し、東側には太閤町割の道路の推定ラインが通る。周辺では北西側で209次調査、同一敷地内の北西側で第10次調査、南側で第148次調査が行われている。第10次調査では土坑を中心として井戸・溝・ピットを検出し、弥生時代から古墳時代の土器を含んだ11世紀から16世紀にいたる遺物が出土している。第148次調査では土坑・井戸・溝・ピットを検出し、弥生時代から古墳時代の土器を含んだ11世紀後半から14世紀にいたる遺物が出土している。また、被熱を受けた土坑と銅製品の鋳型・増場が出土しており、当地での銅製品の生産が指摘されている。

Ⅲ. 調査の記録

1. 調査の方法と経緯

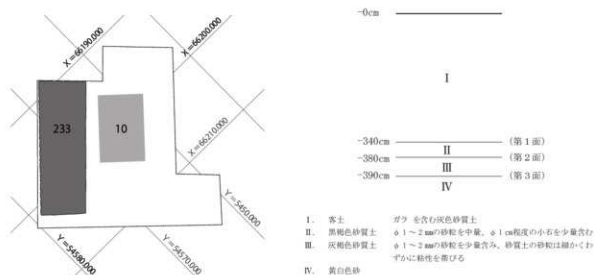
調査区は廃土処理の都合上、第3図のように東西に分け、西側を1区、東側を2区として調査を実施した。8月19日に機材搬入と1区の表土剥ぎを行い、8月21日から9月4日まで1区2面の精査、9月5日に3面の精査を行った。9月6日から重機による1区の埋め戻しと2区の表土剥ぎを行い、9月9日から9月19日まで2区1面の精査をし、19日から25日まで2区2面の精査、25日から28日まで2区3面の精査を行い、29日から30日にかけて埋め戻しと機材搬出を行い、すべての調査を終えた。調査は後述する黒褐色砂質土層上面を1面遺構面として重機で掘削し、以下は人力によって掘削した。

2. 調査の概要

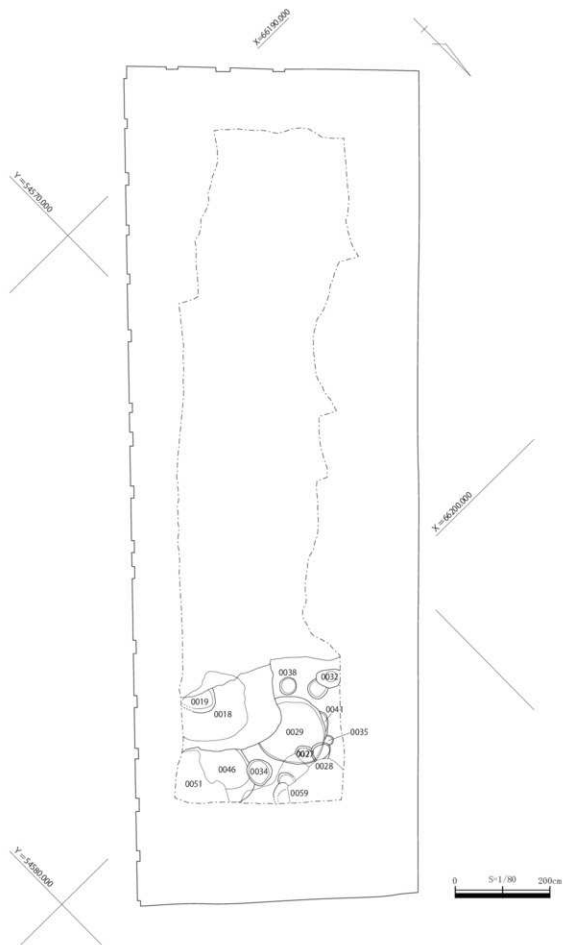
233次調査区は博多遺跡群の二列目の砂丘の南端付近に位置する。現況は平坦で、現地表は標高約6.2mを測る。客土の下、地表下3.4mで黒褐色砂質土(1面)、3.8mで灰褐色砂質土(2面)、3.9cmで黄白色砂(3面)となる。1区と調査区中央は大きく攪乱を受けており、2区では2面と3面の境となるやや汚れた黄白色砂層上面で2面の遺構を検出した。この基本層位は同地北西側で1980年に実施された第10次調査の層位とおおよそ対応する。

ただし、1区は1面が完全に削平されており全く残っていないこと、2区は遺構の切り合いが激しく、本来の掘方上面が残っていない遺構が多数あることから、調査時上下関係として検出した遺構面は、必ずしも年代の先後関係を示すものではない。これらの遺構には層序以外の要素から年代を決め難いものもあることから、暫定的な位置関係としてこれに従った順に遺構を述べる。

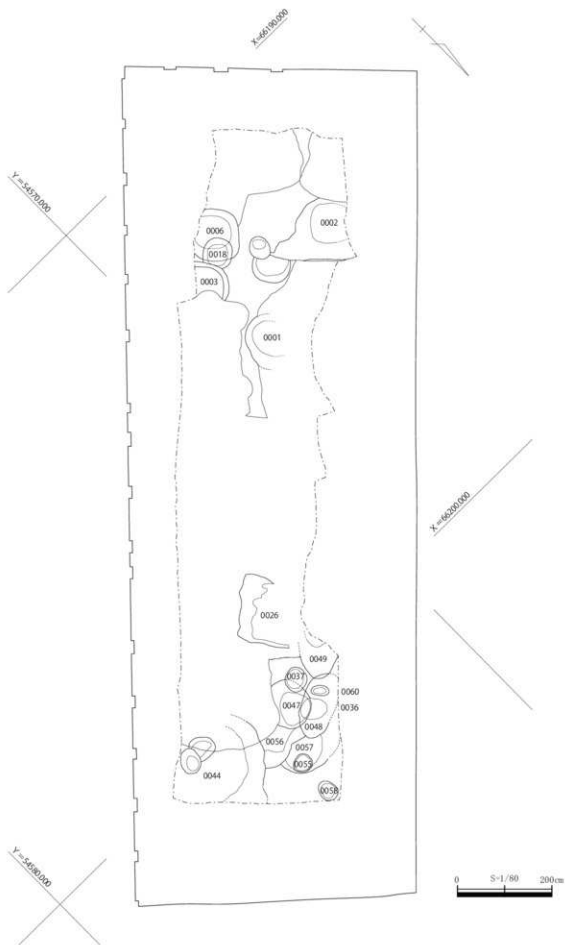
主な遺構は中世の土坑である。遺物は土師皿、貿易陶磁器、陶磁器を中心にコンテナケース14箱ほど出土した。



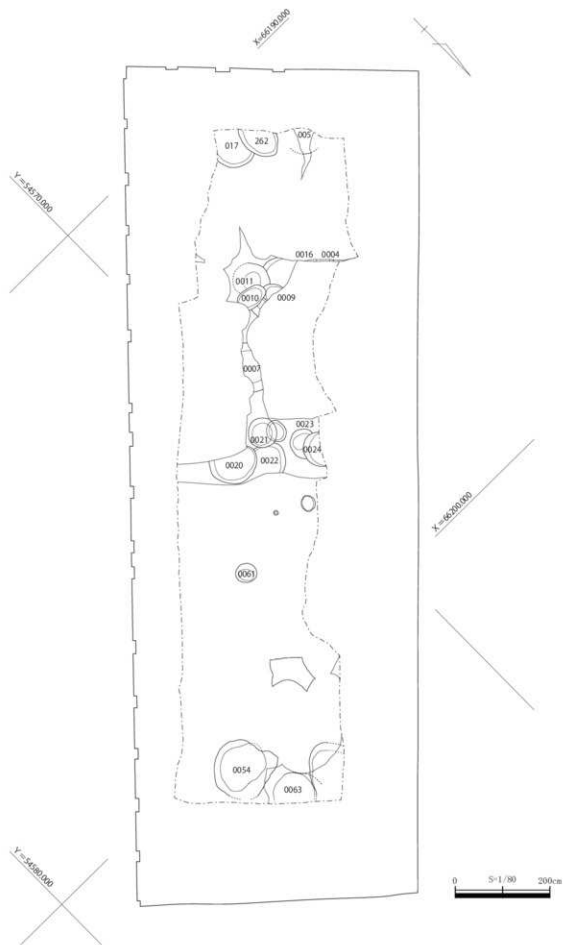
第4図 調査区配置図(1/500)と基本層序



第5図 第1面 遺構配置図 (1/80)



第6図 第2面 遺構配置図 (1/80)



第7図 第3面 遺構配置図 (1/80)

3. 遺構と遺物

1) 第1面

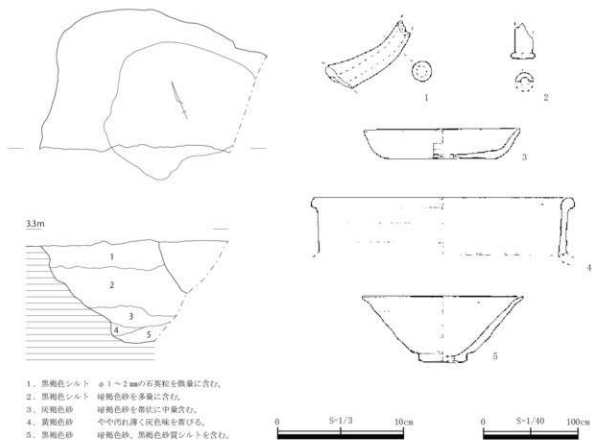
第1面検出遺構として、基本層序（第4図）2層、黒褐色砂質土層上面で検出した遺構とそれに伴う遺物について述べる。

SK0018（第8図）

調査区東側で検出した。SP0019に切られ、SK0029、SK0046を切る。掘方平面は2.06 m以上×2.80 m以上の不整形な円形で、南西側約半分は攪乱により消失し、部分的に底面が残る。検出面から底面までの深さは1.11 mを測る。断面形は不整形なすり鉢状であり、埋土は黒褐色シルトを主体とする。遺物は土師皿を主体とし、須恵器、白磁、越州窯系青磁、龍泉窯系青磁、天目碗などが出土した。遺構の時期は14世紀頃。

出土遺物（第8図）

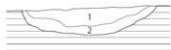
1は天目の水注。注口のみ残存する。2は白磁片。残存長2.2cm、復元径1.4cm、孔径0.7cmを測る。3は土師皿。口径12.5cm、底径8.8cm、器高2.3cmを測る。底部は糸切で、焼成後穿孔を施す。4は白磁の耳壺。口縁部から頸部にかけて残存する。復元口径22.0cm。内外面に施軸後、内面の軸を抜き取る。口縁端部は丸く肥厚する。Ⅲ-2類。5は天目碗。復元口径12.8cm、復元高台径3.8cm、器高5.2cmを測る。内面全体、外面体部下位まで厚く施軸する。



第8図 SK0018（1/40）および出土遺物（1/3）



3.2m



1. 暗褐色砂 や中粒性あり、 ϕ 1~3cmの緑い黄褐色粘質土をシト上に中量含む。
2. 暗黒褐色シルト ϕ 0.5~1mmの濃粒を中量、褐色砂をまだらに中量含む。



第9図 SK 0029 (1/40)

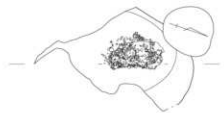
類。10は白磁碗。復元口径17.0cm、復元高台径6.6cm、器高6.6cmを測る。口縁は屈折し、上端部は水平となる。内面は上位の沈線以下に細い櫛目文を施す。白磁碗V-4類。11は白磁碗。復元口径16.6cm、高台径5.4cm、器高5.7cmを測る。直口縁で内面見込みに段をもつ。軸は黄白色。碗II類。12は青磁碗。復元口径16.5cm、復元高台径5.4cm、器高6.5cmを測る。内面見込みに段をもち、内面から外面体部中位まで黄褐色の釉が掛かる。13は中国陶器の鉢。復元口径18.4cmを測る。内外面全体に薄く灰色の釉葉を掛ける。I類。14は耳壺。口縁から体部にかけて残存し、復元口径10.2cmを測る。肩部には段をもち、その下位には櫛描文が施される。内外面全体に褐色の釉が掛かる。VI類。15・16は黄釉鉄絵盤。15は復元口径31.8cm、復元底径18.2cm、器高8.6cmを測る。黄釉葉は内面全体に掛かり、口縁部に目跡が見られる。16は底部の一部。内面のみに施釉が行われ、底部には墨

SK0029 (第9図)

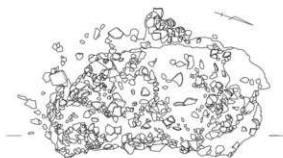
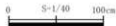
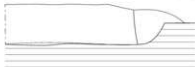
調査区北東側で検出した。SK0018、SP0027、SP0028に切られる。掘方平面は直径1.43mの円形で、検出面から底面までの深さは0.3mを測る。断面は浅いすり鉢状を呈す。埋土は暗褐色砂、暗黒褐色シルトを主体とする。遺物は土師皿、白磁、黄釉碗、盤などが出土しており、12世紀の遺物を主体とするが、遺構の切り合いから遺構の時期は14世紀と考えられる。

出土遺物 (第11図)

6~16は上層の暗褐色砂、17~21は下層の黒褐色シルト内から出土した。6は土師皿。口径8.9cm、底径6.9cm、器高0.9cmを測る。底部は糸切りで、板状圧痕を残す。7は土師皿片。底部の一部が残存し、内面に墨書が書かれる。8はガラス増埴片。体部下位の破片であり、内外面に黄色~灰色がかかった緑色のガラスが付着する。9は白磁碗。復元口径16.5cm、高台径6.8cm、器高7.0cmを測る。高台の削りは浅く、底部は肉厚であり、内面体部下位に1条の沈線がめぐる。白磁碗IV-1



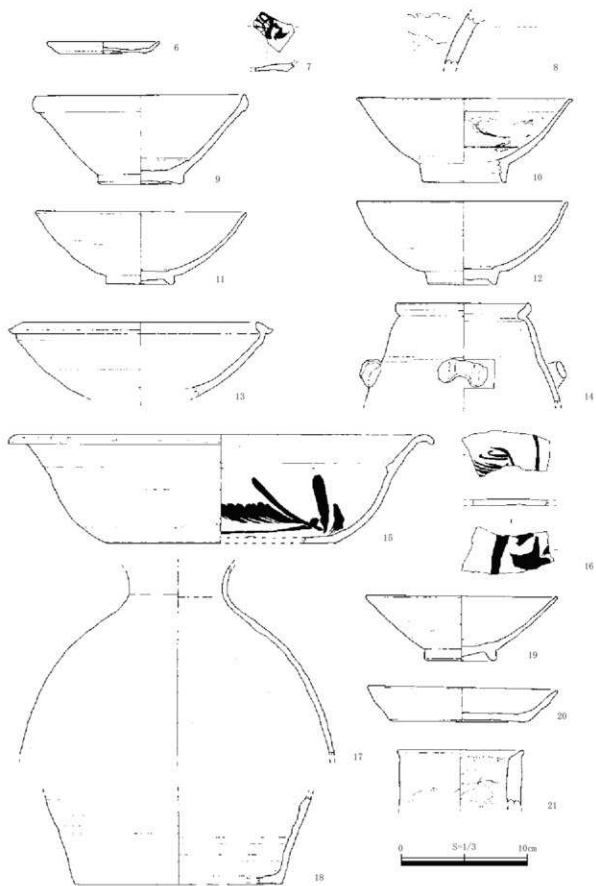
3.2m



2.7m



第10図 SK 0046 (1/40・1/10)



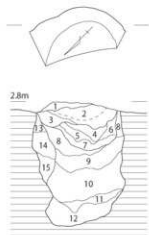
第11圖 SK 0029 出土遺物 (1 / 3)

書が書かれる。文字は欠けが大きく判別できない。17・18は高麗無軸陶器の壺。17は頸部から体部にかけて残存する。器壁は薄く、内外面全体に強い回転ナデを施す。18は体部下位から底部にかけて残存する。復元底径16.4cmを測る。器壁は薄く、内外面全体に強い回転ナデを施す。17と同一個体と考えられる。19は白磁椀。口径15.1cm、高台径5.7cm、器高5.1cmを測る。直口縁で、見込みに段をもつ。白磁椀Ⅷ-2類。20は土師器の杯。口径15.0cm、底径11.0cm、器高2.7cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を残す。21はガラス増埴。復元径10.0cmを測る。口縁から体部にかけて残存し、内面の一部に黄色のガラスが付着する。

SK0046 (第10図)

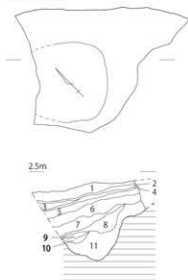
調査区東側で検出した。SK0018、SK0026、SP0034、SP0052、SP0059と複数の攪乱に切られており、上端が消失していることから、平面で掘方の形状を把握することはできない。切り合う遺構の壁と埋土の状況から遺構の範囲を復元した。遺構面から底面までの深さは0.45mを測る。上面は広範囲を攪乱が覆っており、除去すると意図的に砕かれた大量の土師器片の集積を検出した。埋土はややシルト質の暗〜黒褐色砂質土を主体とする。遺物は土師皿、白磁、青磁などが出土し、遺構の時期は14世紀ごろ。

SK 0001



1. 黒褐色土 φ 0.5～5mmの赤褐色粘質土。φ 1～2cmの炭粒を少量含む。
2. 黒褐色土 φ 0.5～5mmの赤褐色粘質土。φ 1～3cmの焼土ブロックを中量、φ 1～2cmの炭粒を多量、磨砕の緑片を微量を含む。
3. 黒褐色土 1層に剥離する。φ 5mmの赤褐色土を少量。φ 1cmの炭粒をわずかに含む。
4. 暗褐色砂質土 φ 5mmの炭粒。淡褐色砂をφ 1cmの塊状に少量含む。
5. 暗褐色砂質土 4層より色調暗く。淡褐色砂をφ 2～4cmの塊状に少量含む。
6. 暗褐色砂質土 炭を多量に含む黒色土を含む。
7. 暗褐色砂質土 6層と同質だが、黒味が更に強い。
8. 暗褐色土 中や青味が残り。φ 2～3mmの炭粒を少量含む。
9. 暗褐色土 8層よりやや色調淡い。
10. 暗褐色土 暗褐色土を密に含み、8・9層よりやや色調淡い。φ 5mmの炭粒。φ 3～5mmの炭粒を少量含む。
11. 黒褐色砂質土 炭を多量に含む。
12. 淡褐色砂
13. 褐色砂
14. 褐色砂 12層よりやや色調淡い。
15. 褐色砂 13層より色調淡い。

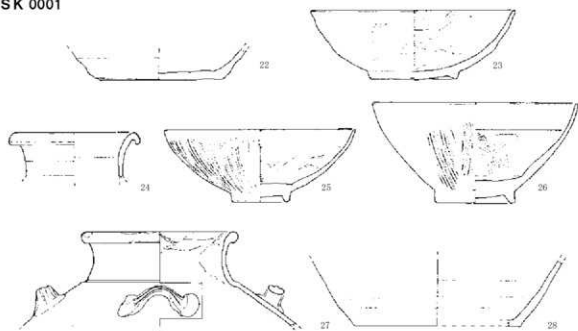
SK 0002



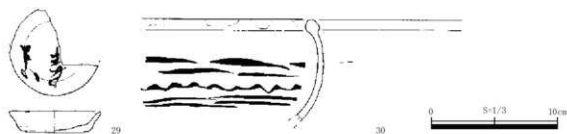
1. 黒褐色シルト 暗灰色シルトを含む。
2. 灰褐色シルト 黒色シルトを含む。
3. 黒色シルト ごく薄く帯状に灰褐色シルトを含む。
4. 黒色シルト 灰褐色シルトと互層になる。
5. 黒色シルト 8層よりやや黒味が強い。
6. 褐色砂 黒褐色シルトを帯状に含み互層になる。
7. 褐色砂 細砂。暗褐色砂質シルトをφ 5cmのシク上に含む。
8. 暗褐色砂 褐色砂をさらに中量含む。
9. 暗褐色砂質シルト
10. 褐色砂
11. 褐色砂 黒褐色砂をさらに少量含む。

第12図 SK 0046 (1/40・1/10)・SK 0001・SK 0002 (1/40)

SK 0001



SK 0002



第13図 SK 0001・SK 0002 出土遺物 (1 / 3)

2) 第2面

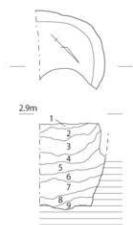
第2面検出遺構として、基本層序(第3図)3層、灰褐色砂層上面で検出した遺構とそれに伴う遺物について述べる。

SK0001 (第12図)

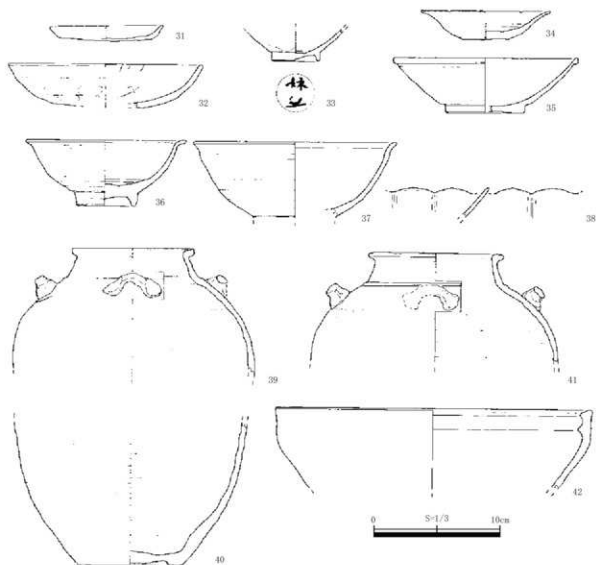
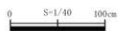
調査区中央で検出した。土坑北西側の大半は攪乱により消失しており直径は不明だが、残る掘方から円形の土坑と考えられる。検出面から底面までの深さは1.32mを測る。断面形はU字状であり、埋土は黒褐色土、暗褐色砂質土を主体とする。遺物は須恵器、瓦器碗、白磁、同安窯系青磁などが出土した。遺構の時期は12世紀。

出土遺物(第13図)

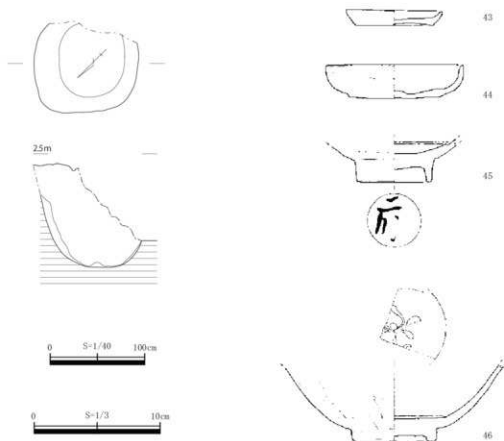
22は土師器皿。復元底径10.0cmを測り、底部は糸切り。23は瓦器碗。復元口径16.2cm、底径6.9cm、器高5.5cmを測る。内外面全体を横方向にミガキ調整する。24は白磁壺。口縁から頸部のみ残存し、復元口径9.3cm、口縁端部は強く折り曲げる。Ⅲ類。25は龍泉・同安窯系青磁。復元口径15.0cm、高台径4.6cm、器高5.7cmを測る。外面に縦櫛文、内面上位に1条の沈線がめぐり、以下に篋と櫛による文様を施す。内面見込みに段を持つ。釉は黄褐色味が強い緑色を呈し、内外面全体に掛けられ



- | | |
|-------------|--------------------------------|
| 1. 緑褐色砂質シルト | φ 1mmの炭粒を少量含む。 |
| 2. 黒褐色シルト | φ 5mmの炭粒を中量、φ 5mmの褐色砂をシ状に少量含む。 |
| 3. 緑褐色砂質シルト | φ 5mmの炭粒を微量、φ 5mmの石英粒を微量に含む。 |
| 4. 緑褐色砂質シルト | 黒褐色シルトを多量に含む、φ 2~3cmの塊土塊を少量含む。 |
| 5. 黒褐色シルト | 4層に含まれる黒褐色シルトと同質。 |
| 6. 緑褐色砂質シルト | 黒褐色シルトを常状に少量~中量含む。 |
| 7. 黒褐色シルト | 緑褐色砂質シルトを含む。 |
| 8. 黒褐色シルト | 緑褐色砂質シルトを多量かつ7層より均質に含む。 |
| 9. 黄白色砂 | φ 1~2mmの緑褐色砂質シルト粒を少量含む。 |



第14図 SK 0003 (1/40) および出土遺物 (1/3)



第15図 SK 0006 (1/40) および出土遺物 (1/3)

る。青磁碗0類。26は同安窯系青磁碗。復元口径16.2cm、高台径6.3cm、器高7.9cmを測る。内面上位に1条の沈線めぐり、内外面に太い柳目文を施す。内面見込みは輪状に掻き取る。青磁碗Ⅲ類。27は四耳壺。口縁部から体部にかけて残存し、復元口径11.6cmを測る。外面全体に褐釉が掛かり、一部口縁内面まで掛かる。口縁部には目跡が見られる。C群。28は壺底部。復元底径13.4cmを測る。外面全体に褐釉が掛かる。27と同一個体と考えられる。

SK0002 (第12図)

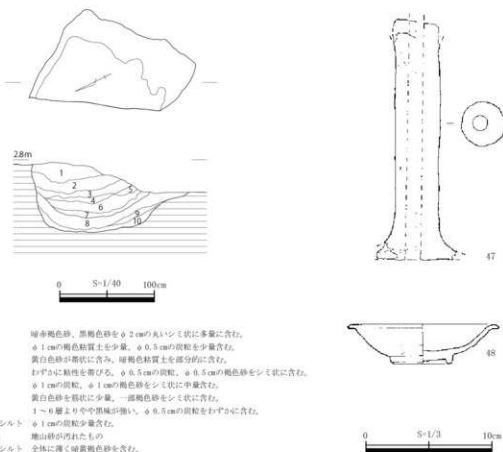
調査区西側で検出した。土坑全体が攪乱を受けており、堀方上面は本来の形状を留めない。直径93cm以上、検出面から底面までの深さは83cmを測る。埋土は黒色シルトを主体とする。遺物は土師皿、黄釉盤などが出土した。遺構の時期は15世紀。

出土遺物 (第13図)

29は土師皿。復元口径7.2cm、復元底径5.2cm、器高1.7cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕を残す。内面底部に墨書が書かれる。30は黄釉鉄絵盤。口縁から体部にかけて残存する。内面の口縁下位から体部にかけて釉が掛かり、釉下に鉄絵が施される。外面は無釉。口縁部に目跡が見られる。I-2 b類。

SK0003 (第14図)

調査区中央東側で検出した。東側は攪乱に消失し、南東側は調査トレンチ外に続く。直径0.8m以上、残る堀方から円形の土坑と考えられる。検出面から底面までの深さは0.92mを測る。埋土は黒褐色シルト、暗褐色砂質シルトを主体とする。遺物は土師皿、白磁、同安窯系青磁などが出土した。



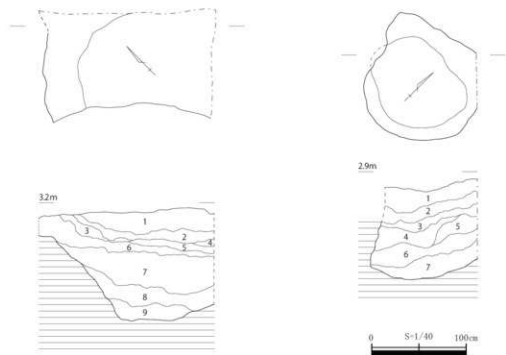
1. 埴間色砂 埴間色砂、黒褐色砂をφ 2 cmの丸いシム状に多量に含む。
2. 埴間色砂 φ 1 cmの褐色結質土を少量、φ 0.5 cmの炭粒を少量含む。
3. 埴間色砂 黄白色砂が帯状に含む。埴間色結質土を部分的に含む。
4. 埴間色砂 わずかに粘性を帯びる。φ 0.5 cmの炭粒、φ 0.5 cmの褐色砂をシム状に含む。
5. 埴間色砂 φ 1 cmの炭粒、φ 1 cmの褐色砂をシム状に中量含む。
6. 埴間色砂 黄白色砂を帯状に少量、一部褐色砂をシム状に含む。
7. 埴間色砂 φ 1 cmよりやや黒味が強い。φ 0.5 cmの炭粒をわずかに含む。
8. 黒褐色砂質シルト φ 1 cmの炭粒少量含む。
9. 埴間色砂 地山砂が汚れたもの。
10. 埴間色砂質シルト 全体に薄く埴間色砂を含む。

第16図 SK 0026 (1/40) および出土遺物 (1/3)

遺構の時期は12世紀。

出土遺物 (第14図)

31は土師皿。口径9.0cm、底径7.2cm、器高1.2cmを測る。底面は糸切りで、板状圧痕を残す。32は土師器器の坏。口径15.4cm、復元器高3.5cmを測る。丸底であり、底部は回転ヘラ切りで板状圧痕を残す。33は白磁碗。体部から底部にかけて残存し、高台径3.9cmを測る。高台外面には墨書が書かれる。34は白磁皿。復元口径10.2cm、底径3.5cm、器高2.2cmを測る。口縁部は外反し輪花とする。体部内面に段をもち、内外面全体にやや青味のある白色の釉がかかり、底部外面は削り取る。白磁皿Ⅹ類。35は形竈の白磁碗。復元口径13.4cm、復元高台径6.2cm、器高4.4cmを測る。8世紀末～9世紀前半。36は白磁小碗。口径12.6cm、高台径4.7cm、器高5.2cmを測る。内面見込みの釉を輪状に掻き取る。口縁部は外反し、輪花とする。白磁碗Ⅶ類。37は白磁碗。復元口径16.0cmを測る。口縁部は屈曲し、内面上位に1条の沈線を施す。碗Ⅴ類。38は白磁皿。口縁部のみ残存し、口縁端部を花卉状にし、体部を花卉ごとにヘラで押し、その後ヘラで縦線を入れ立体的に整形する。内外面全体に灰色味が強い白色の釉が掛かる。釉はやや透明度が低く光沢が強い。39～41は四耳壺。39は口縁部から肩部にかけて残存しており、口径9.6cmを測る。内外面に灰色がかかった薄い緑色の不透明な釉が掛かり、外面に櫛状波文が施される。40は四耳壺。体部から底部にかけて残存しており、復元底径8.2cmを測る。内外面に灰色がかかった薄い緑色～黄緑色の白濁した釉が掛かる。39と同一



1. 埴輪色砂 直径1cmの破片、小石を中量含む。
2. 埴輪色砂 直径1～2cmの段を少量含む。
3. 埴輪色砂 直径1～2cmの段、直径2～3cmの焼土を含む。
4. 埴輪色砂 直径0.5cmの段を少量含む。
5. 埴輪色砂 黄白色砂、白色砂を帯状に中量含む。
6. 埴輪色砂 黄白色砂を少量含む。
7. 埴輪色砂 黄白色砂、汚れた褐色砂をまだらに含む。
8. 埴輪色砂 やや薄い埴輪色砂をわずかに含む。
9. 黄白色砂 埴輪色砂を粒状に少量含む。

1. 埴輪色砂 わずかにシルト質。黄白色砂を少量含む。
2. 灰褐色砂 黄白色砂をまだらに中量含む。
3. 埴輪色砂 わずかにシルト質。灰褐色砂を微量に含む。
4. 黄白色砂 埴輪色砂を微量に含む。
5. 埴輪色砂 黄白色砂を直径10mmの塊状に中量含む。
6. 黄白色砂 埴輪色砂を中量含む。外側ほど固い層が厚す。
7. 褐色砂 地山由来の黄白色砂に酸化した鉄分を含む。

第17図 SK 0044・SK 0054 (1/40)

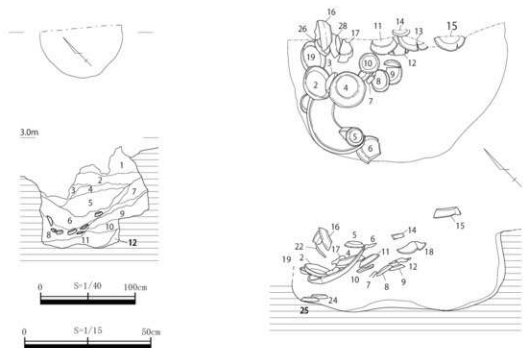
個体と考えられる。41は口縁部から肩部にかけて残存しており、復元口径10.6cmを測る。内外面に暗く灰色がかった薄い緑色の釉が掛かり、肩部には櫛描波状文が施される。42は鉢。口縁部から体部にかけて残存し、復元口径25.0cmを測る。内外面とも無釉である。

SK0006 (第15図)

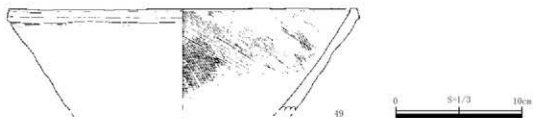
調査区西側で検出した。土坑南北は攪乱により消失し、掘方上面は本来の形状を留めない。直径1.86m以上、検出面から底面までの深さは0.85cmを測る。埋土は黒色シルト、褐色砂を主体とする。遺物は土師皿、コネ鉢、白磁、同安系赤青磁などが出土し、遺構の時期は12世紀。

出土遺物 (第15図)

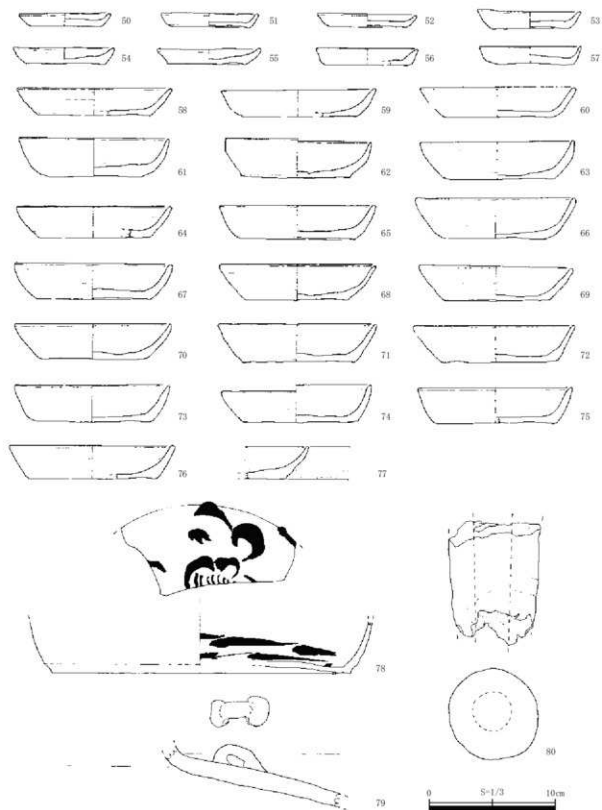
43は土師皿。口径7.6cm、底径6.2cm、器高1.2cmを測る。44は須恵器杯。口径10.8cm、底径7.4cm、器高2.7cmを測る。外面全体を回転ナデ、底部は回転ヘラ切り。45は白磁碗。体部から高台にかけて残存し、復元高台径5.8cmを測る。内面見込みに段を有し、高台外面には墨書が書かれる。白磁碗V類。46は龍泉窯青磁碗である。体部から底部にかけて残存し、底径6.6cmを測る。外面に鑄蓮弁文、内面見込みに段を有し、細い蓮華文の印刻を施す。青磁碗II類。



- 土師器一坑廃棄
- | | | |
|-----|----------|--------------------------------|
| 1. | 埴輪色砂 | φ 2 ~ 5mmの砂粒を少量、灰褐色砂をまだらに中量含む。 |
| 2. | 埴輪色砂 | φ 2 ~ 5mmの砂粒を少量含む。 |
| 3. | 赤色砂質シルト | φ 5 ~ 10mmの砂粒を中量含む。 |
| 4. | 灰褐色砂 | 埴輪色砂を少量含む。 |
| 5. | 灰褐色砂 | 黄褐色砂をまだらに少量含む。 |
| 6. | 黒灰色砂質シルト | φ 5 ~ 10mmの砂粒を多量に含む。 |
| 7. | 埴輪色砂 | 灰褐色砂を微量に含む。 |
| 8. | 黒灰色砂質シルト | 6層よりやや細かい、φ 5 ~ 10mmの砂粒を多量に含む。 |
| 9. | 黄褐色砂 | 灰褐色砂を少量含む。 |
| 10. | 灰褐色砂 | φ 2 ~ 5mmの砂粒を中量含む。 |
| 11. | 灰褐色砂 | 黄白色砂をまだらに中量含む。 |
| 12. | 黄白色砂 | 灰褐色砂をまだらに少量含む。 |



第 18 図 SK 0063 (1/40・1/20) および出土遺物① (1/3)



第19図 SK 0063 出土遺物② (1/3)

3) 第3面

第3面検出遺構として、基本層序(第3図)4層、黄白色砂質土層上面で検出した遺構とそれに伴う遺物について述べる。

SK0026 (第16図)

調査区中央東側で検出した。SP0061に切られる。上層は攪乱により大きく削平を受けており、黄白色砂層上面で検出したが、暗褐色砂を主体とする埋土は1面で検出したSK0018と様相が似る。掘方平面は1.45m以上×1.07m以上の不整形な隅丸方形で、北西側約半分は攪乱により消失する。検出面から底面までの深さは0.74mを測る。断面形はすり鉢状であり、埋土は暗褐色砂を主体とする。遺物は土師皿、白磁などが出土し、遺構の時期は11世紀後半から12世紀前半ごろ。

出土遺物(第16図)

47は土師器の器台。残存長19.0cm、径3.5cm、孔径1.2cmを測る。全体を縦方向の強いナデで面的に調整し、下位から脚部裾にかけて横方向にナデ調整する。48は白磁の皿である。復元口径12.0cm、底径4.8cm、器高3.1cmを測る。高台は露胎し、口縁端部は外反する。白磁皿XI類。

SK0044 (第17図)

調査区北東端で検出した。SK0018、SK0046、SP0053に切れ、北東から南東側は調査トレンチ外に続く。切り合いが激しく黄白色砂層上面で土坑の底近くのみを検出したため、正確な土坑の直径はさらに大きいと考えられる。掘方平面は直径1.23mの不整形な円形を呈し、検出面から底面までの深さは0.52mを測る。埋土は暗褐色砂を主体とする。遺物は土師皿、白磁碗などが出土し、遺構の時期は11世紀後半から12世紀前半ごろ。

SK0054 (第17図)

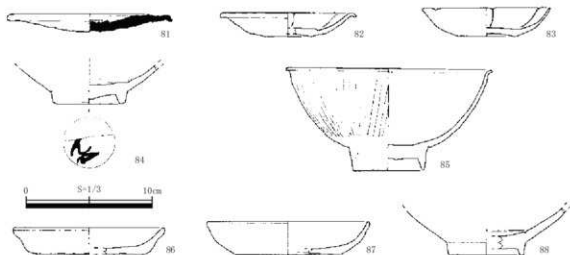
調査区東側で検出した。SK0053に切られる。遺構の殆どはSK0053掘削時に消失しており、黄白色砂層上面で土坑の底近くのみを検出した。その為正確な土坑の直径はさらに大きいと考えられる。遺物は土師皿、白磁碗、瓦などが出土し、遺構の時期は11世紀後半～12世紀前半ごろ。

SK0063 (第18図)

調査区北側で検出した。上面を攪乱により消失しているため、砂丘面での平面検出となった。そのため平面で掘方の形状を把握することはできない。トレンチ壁の断面観察より、底面までの深さは1.05mを測る。第6層から第8層にかけて、中でも第8層に特に完形の土師器が集中して出土する。これより下層は地山の黄白色砂が汚れたものが堆積している。堆積状況から、この土坑は土師器を廃棄するために掘られた土坑であり、比較的掘ってすぐに土師器が完形品のまま一度に廃棄されたことが見て取れる。第6層から第8層は土質の違いにより分層を行ったが、土師器が一度に廃棄された際に堆積した土と考えられる。第5層以上には様々な遺物が含まれており、土師皿廃棄後は様々な物を廃棄する廃棄土坑として活用された、もしくは土師皿廃棄後に一度に埋め戻す際、埋土に多様な遺物が混入したと考えられる。遺物は土師皿、こね鉢などが出土した。遺構の時期は14世紀。

出土遺物(第18・19図)

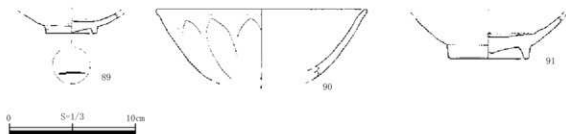
49はこね鉢。口縁部から体部にかけて残存しており、復元口径27.4cmを測る。50～77は土師器の皿と杯。底部は全て糸切りで、皿は口径7.3cm～8.2cm、杯は口径10.1cm～13.0cmを測り、平均口径は12.0cm。78は黄軸鉄絵盤。底部のみ残存し、復元底径23.4cmを測る。内面のみ黄軸を掛け、鉄絵を施す。外面は無軸。79は中国陶器の甕。把手がつく肩部のみ残存する。内外面全体に褐色の軸が掛けられる。80は轆の羽口。残存長9.6cm、径7.2cm、口径3.1cmを測る。両端とも欠損するが、下方は被熱が顕著であり、端部は僅かに鉄滓が付着する。



第20図 その他の出土遺物（1/3）

4) その他の遺物（第20・21図）

81はSP0007から出土した須恵器の蓋。復元径13.0cm、器高1.4cm、つまみ部の直径2.7cmを測る。器体全体が歪み、天井部は陥没する。82・83はSP0035から出土した白磁皿。82は口径10.8cm、復元底径3.6cm、器高1.9cmを測り、底部はやや上げ底である。体部は僅かに丸みを帯び立ち上がり、口縁は外反し5弁の輪花とする。底部内面に目跡はなく、体部内面に篋押圧縦線を入れる。白磁皿IV類。83は口径10.1cm、底径4.2cm、器高2.3cmを測り、底部はやや上げ底である。体部は僅かに丸みを帯び立ち上がり、口縁は6弁の輪花とする。体部内面に篋押圧縦線を入れる。84は白磁碗。体部から高台にかけて残存し、復元底径5.8cmを測る。内面見込みは段をもち、輪状に掻き取る。高台裏に墨書をもつ。白磁碗Ⅶ類。85はSP0035から出土した白磁碗。口径16.4cm、高台径5.6cm、器高8.0cmを測る。外面に細かい縦の櫛目文を施し、内面は無文。白磁碗V類。86～88は2層黒褐色砂質土内より出土した。86・87は土師器の坏。86は復元口径12.0cm、復元底径8.4cm、器高2.1cmを測る。87は復元口径13.0cm、復元底径8.4cm、器高2.6cmを測る。88は白磁碗である。体部から高台にかけて残存し、復元高台径6.0cmを測る。内面見込みに1条の沈線がめぐり、体部から高台の一部にかけて施軸される。89は遺構外から出土した白磁碗。底径4.0cmを測り、高台外面には墨書が書かれる。90は遺構外から出土した龍泉窯系青磁碗。口縁から体部にかけて残存し、復元口径16.6cmを測る。外面に鎗蓮弁文を施す。碗Ⅱ類。91は白磁碗。体部から高台にかけて残存し、高台径6.4cmを測る。内面見込みは輪状に掻き取る。碗Ⅶ類。



第21図 遺構外の出土遺物（1/3）

IV. まとめ

今回の調査では、11世紀後半から14世紀を中心とした遺物と土坑・ピット等の遺構を検出した。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、貿易陶磁器、鉄器片等が出土した。土師器は中世の皿・坏を主体とし、調査区全体でもこの2種が出土遺物の大半を占める。

最古段階の遺物は弥生時代の甕片が出土した。いずれも破片資料であり詳細は不明だが、終末期頃のものと考えられる。同時期の遺構は検出されず、弥生土器が出土したSP0039、SP0047、SK0062・0063はいずれも後世の遺構だが、弥生時代の集落の広がりがかげえる。続いて古代の土師器・須恵器・黒色土器が出土した。第3面で検出したSP0048、SP0049からは該期の土師器・須恵器のみが出土している。この古代の遺構が今回の調査地での遺構の初現となる。SK0003では11世紀後半から12世紀前半の遺物と共に邢窯の白磁碗が出土している。

明確に遺構と遺物が増加するのは11世紀後半から12世紀遺構である。遺構は土坑・ピットからなり、遺物は土師器や瓦器碗の他、貿易陶磁器が急激に増加する。貿易陶磁器は白磁碗IV類、V類、龍泉窯系青磁碗III類、同安窯系青磁碗I類が主体をなす。

13世紀から14世紀にかけても遺構は土坑・ピットを主体しており、土師器の坏・皿や貿易陶磁器が出土した。貿易陶磁器の量は前代より減少し、今回の調査で出土した当該期の遺物の大半は土師器の皿・坏である。また、SK0063で14世紀の土師器の一括廃棄の様相が見て取れた。また、関連する遺構は見られないものの、当該期の遺構であるSK0029ではガラス埴塀片、SK0063では輪の羽口が出土しており、当地周辺に生産地があったことがうかがえる。

15世紀の遺構はSK0002を検出しており、遺構検出時には少量の近世陶磁器が含まれるなど、遺構として確認できる例は少ないものの、生活圏が存続する様子が見てとれる。

以上より、今回の調査では弥生時代の遺物と少数の古代の遺物・遺構を含んだ、11世紀後半から14世紀頃を中心とした生活圏の様相が見て取れた。



(1) 1区2面全景 (北西から)



(2) 1区3面全景 (北西から)



(1) 2区1面全景 (北西から)



(2) 2区2面全景 (北西から)



(1) 2区3面全景(北西から)



(2) 2区1面東側検出状況(北東から)



(3) 2区2面東側検出状況(北東から)



(4) 2区3面東側検出状況(北から)



(5) 2区3面南側検出状況(北西から)



(1) SK 0001 検出状況 (北から)



(2) SK 0018 検出状況 (北東から)



(3) SK 0006 検出状況 (南から)



(4) SK 0044 検出状況 (南東から)



(5) SK 0029 検出状況 (北から)



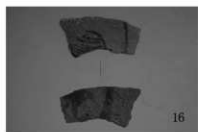
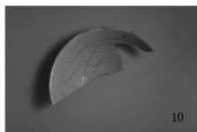
(6) SK 0046 検出状況 (北西から)



(7) SK 0062 検出状況 (南から)



(8) SK 0044 土層断面 (南東から)





出土遺物②

報 告 書 抄 録

ふりがな	はかた179							
書 名	博多179							
副 書 名	一博多遺跡群第233次調査報告一							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1422集							
編 著 者 名	三浦 悠英							
編 集 機 関	福岡市教育委員会							
所 在 地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2021年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はかたいせきぐん 博多遺跡群	ふくおほせきぐんふくおほし 福岡県福岡市 はかたくれいせきぐんまら 博多区冷泉町474-1	40132	0121	33° 35' 44"	130° 24' 42"	20190819 ～ 20190930	84.5	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
博多遺跡群	集落	中世	柱穴・土坑	土師器・貿易陶磁器				
要 約	<p>博多遺跡群は、那珂川・御笠川の河口に形成された3列の砂丘の上に立地している。今回の調査地は、2列目の砂丘の南端付近に位置する。南側に隣接する第148次調査では、12世紀後半を中心とした遺構から、土師器、貿易陶磁器、青銅器の鋳型などが出土した。今回の調査では、12世紀の遺構を中心に、古代から15世紀頃にかけての遺跡を確認した。遺構は大型土坑やピットからなる。大型土坑は、遺物の埋没状況と土層から廃棄土坑と考えられる。遺物は貿易陶磁器、土師器、輪の羽口、銭、瓦片などが出土した。調査の結果から、当調査地点には、12世紀を中心に生活圏が存在していたことが明らかとなった。</p>							

博多 179

—福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1422 集—

令和3年3月25日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社 宣巧社
福岡市博多区吉塚8丁目7-30

